

.....

隨 想

.....

## 浅田賞など

仲 威 雄\*



それは将に福音であつた。日本建築学会の事務局長久保田さんから自分が日本鉄鋼協会の浅田賞の候補に挙がっていると報らされたことは。その頃漸く回復にむかつていたとはいうものの先年末パリでこじらせた風邪は帰国後内科、耳鼻科のお医者さんの十分な治療にもかかわらず一向に抜け去る気配がなかつた。自分ながら時を待たねばならない、病気の時は自然の流れにまかせねばいけないなどと手帳に書いたり、心に言いきかせたりした。浅田賞をいただいた時、それは東京工業大学での春季総会の席上であつたが、桜が咲いているのに寒さに震えていた。そこには三島徳七先生も見えていた。老大家があんなにお元気なのに自分は どうしてこう弱いのかと残念に思つた。中野会長から賞状とメダルを受けた時は壇の上で、よろめいたりしないように精一杯頑張つていた。次の日であつたか記念講演をした。聴いて下さつた方は少なかつた。多分雨天の故であつたらう。それでも無事大任を果たした時は漸く安心した。一つにはその当時、と言つても 1973 年のことであるが、建築はなお鉄鋼需要の最大手であつたから、自分の話の裏にはそのような自負が潜んでいたし、またその事実を日本鉄鋼協会関係の多くの方々に知つていただきたいという願いもあつた。

不景気は現在建築を極端に減らし、設計事務所で閉鎖するものが続いているが、鉄鋼使用量は相変わらず最上位にある。私の講演した主旨は建築は鉄鋼産業と歩調を合せて進歩発展してきたということであつた。その中で特に注意を喚起したいのは建築が人間と社会と最も密接な関係をもっている。衣食住の住を担当しているからである。ここでつかう鋼材の安全性には鉄鋼に携る多くの方々にもつと強く関心をもつていただきたい。建築は特に耐震構造として鋼材の延性、靱性に頼つて設計されるが、降伏強度以上に力を負担した鋼の物理的性質がまだまだわかつていない。常温またはそれよりやや高い温度の鋼材のクリープかりラクゼーションも研究がない。地震のような low-cycle fatigue の生じる場合の鋼部材など接合部を含めての挙動については実験的研究だけでは解明されたとはいえない。

浅田賞を受けたということで、自分の大学の教室の全教職員が非常に喜んで下され非常勤講師の先生方まで加わつて私ども夫婦を鉄鋼会館の一室に招んで下さつた。学科の性質上、芸術家も数人居られる。洋画の荻太郎先生、福島誠先生など自分自身が習つた先生もそこに座つていて回覧に供した浅田賞の賞状とメダルを見て下さつた。このメダルはよくできている。どういつた方法でつくつたのであろうかというのが、専門家だけに興味をもたれた。はつきりと聴えたのではないが原型を写真で縮小し铸造したのかも知れないと言つておられたようである。大阪造幣廠で製作されたが、浅田長平氏の肖像の彫刻は写真に基づいたものようでもあるし、彫刻家のサインも見当たらない。18Kの金のメダルはずつしりと重く永く大切にしなければならない。家の宝である。

このころから薄紙を剥ぐように極くゆつくりではあるが自分が健康体に戻りつつあることを感じるようになった。もう幻聴に悩まされる心配はなさそうになった。数ヶ月の間寝ても覚めても響いていた耳の奥での音楽がパタリと止まつた。世の中は実に輝かしく希望に満ちているように感じた。突然ロンドンのボイド氏から航空便が届いた。何であろうかと開封してみると国際溶接学会 (I I W) が最高賞のワルター・エドストレームメダルを私に授与するときまつたこと、それにつれてメダルの縁の厚さのと

\* 東京大学名誉教授 東京電機大学教授 工博

ところに受領者の名前を彫りつけるのでそこに入れる名前を教えてくれということ、もし漢字であるならば彫刻家が初めてのことであるから書体、書き順を正確に報らせてほしいこと、受賞は秋のジュッセルドルフ大会の開会式の席上であるといったような報らせであつた。これには驚いたりまた予期していなかつたことの嬉しさもあつた。その年は海外旅行をやめようと決心していたのを翻がえせねばならない。注意に注意をしてそれまで病気をしないように努力した。

ジュッセルドルフでいただいたエドストレームメダルは I I W の元会長ワルター・エドストレーム氏の肖像の横顔が打ち出されているブロンズの芸術作品である。作者のサインが G S L と刻印してある。後で分かつたことであるがこれはスウェーデンの著名な女流彫刻家 グンボール・スペンソン・ルンドクピストの頭文字であつた。レリーフは非常に厚く深くそしてデリケートで原型の塑像が実によくできていることを示している。ちょうど古代ギリシャの紀元前 5~6 世紀の銀貨の製作と同じ方法によつていらしい。もつともそのころは手打のハンマーでつくつていたから、銀貨の中には縁にひびが入つているのもあるし、型のあたる位置が一枚ごとに少しずつは変わるので、図柄が外れたり、彫刻家名が飛び去つてしまつたりしている。その様な実物、デカドラクムとかテトラドラクムはロンドンの大英博物館に陳列されてあるから興味を感じられる方は是非立寄られるといいとおすすめする。ギリシャの芸術を知るためには欠かせないものである。

1973 年という一年の間に春に浅田賞、秋にエドストレーム賞を受けた。そして風邪は幸いに再発しないで今日に至つている。日本鉄鋼協会の厚意に心からありがたいとお礼を述べずにはおれない。浅田賞を受けた時、三島徳七先生が早速私のところによつて来て下さつて、おめでとうおめでとうと何回も言われた。エドストレームメダルを持つて東京電機大学の丹羽保次郎学長の室を訪ねた時、温顔を一層温顔にして喜ばれ、早速それを校友会誌の表紙にしたいと言われた。自分にとつて光栄の記念号ができた。尊敬していた二人の先生の愛情の溢れた動きや言葉は今も強く私の頭の中に残つている。